

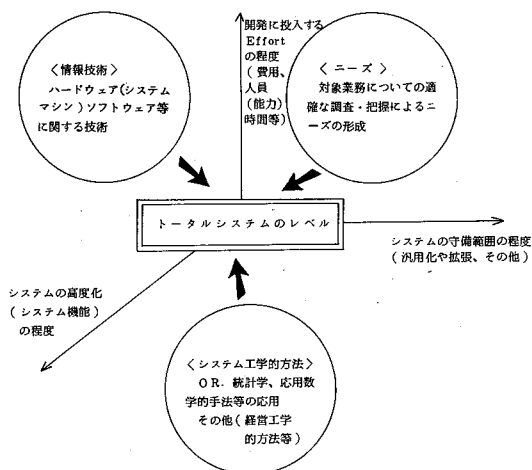


図 2. 2 トータルシステムへのアプローチ視点の構成とシステムレベルの決定要因

した。すなわち、当社としては（ハードウェア、ソフトウェアを含む）情報技術及びシステム工学的手法の蓄積をベースとして、ユーザーとともに対象業務のシステムの分析を行ない、トータルシステム開発へ向けての構想作業を行なっていくというものである。そして、これらの作業を通して共通の課題としてのニーズの形成、深化を図っていくというコンサルティングワークとしての新たな業務形態とその方法論の確立を図っていきたいと考えている。とりわけ、情報システムの機能的高度化、多様化及び大規模化の進む最近の傾向のなかで、図 2. 2 で示したシステムレベルを決定するファクターとの関係も含めて、その構想段階における作業がきわめて複雑化するなかで、その重要度はますます高まってきている。

さらにこれらの構想段階に引続いてこの成果に立脚した（導入すべきハードウェア構成も含めた）情報システムの詳細設計及び開発実施を経て、実際のシステム運用に至るまでのプロセスをトータルにフォローし得る方法論の構築と実質的な体制創りこそが、今我々に課されている課題であると考えている。

3. システム開発におけるアプローチの基本プロセス

これまで述べてきた問題意識に基づいて、実際の

業務に関するアプローチのシステム的方法について検討を進めてきた。そしていくつかの実際の業務における試行錯誤を経て構成してきたものが図 3. 1 である。

この構成からも明かなように Stage 2 における現況調査の段階から Stage 7 の実施設計・運用に至るまで常に業務全体のシステムの整備を中心テーマとして統一した視点の形成を目指している。各 Stage における具体的作業内容や成果については紙面の都合から省略することにするが、すでにこのような方法により、都市高速道路建設業務、大手ゼネコンや民間デベロッパーによる土地開発業務、さらに地方自治体における広域都市基盤計画業務、鉄道整備効果分析検討業務等のシステム化への取組を進めており、それぞれの問題の特性から種々の方法的なバリエーション

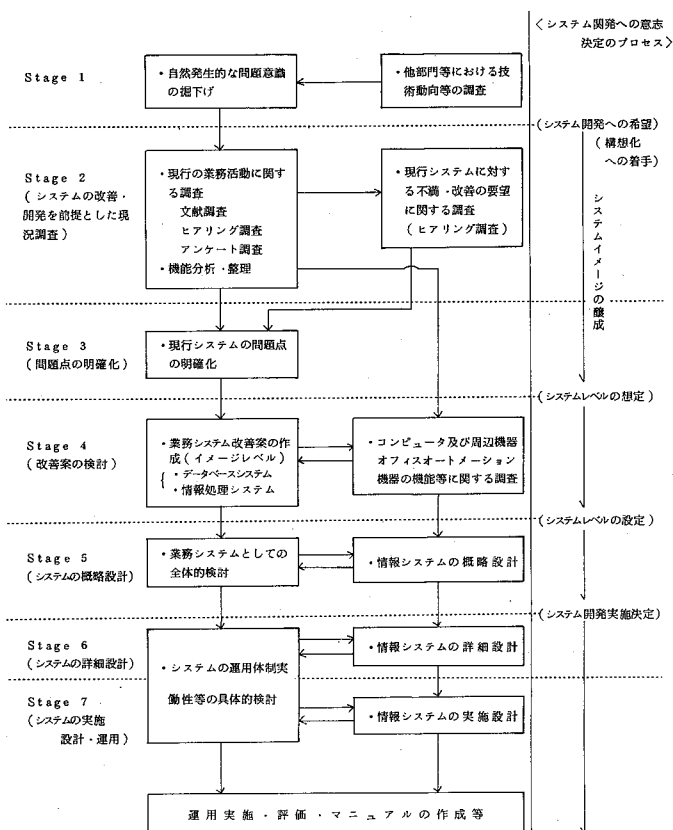


図 3. 1 アプローチにおけるシステム的方法
エーションが生み出され、内容的な豊富化が図られてきている。

なお本報告にあたって御指導いただいた京都大学 春名攻助教授に、謝意を表します。